

1. 病害虫名： ネギハモグリバエB系統
学名 *Liriomyza chinensiis* Kato

2. 発生作物： ネギ

3. 発生地域： 中讃、西讃地域

4. 発生経過

令和3年10月に中讃及び西讃地域のネギ栽培圃場において、ハモグリバエ類による著しい食害痕や葉の白化症状が確認された(写真1)。この被害状況は従来のネギハモグリバエ(以下、A系統という)と異なり、他都府県で発生が認められているネギハモグリバエ別系統(以下、B系統という)による食害と類似していた。

このため、採取した幼虫を羽化させ、農業・食品産業技術総合研究機構野菜花き研究部門に遺伝子解析を依頼したところ、本県で初確認となるB系統と同定された。

5. 国内における発生状況

B系統の発生は、平成28年に京都府で初めて確認されて以降、茨城県、富山県、千葉県、長野県、埼玉県、新潟県、栃木県、三重県、滋賀県、大阪府、愛知県、東京都、佐賀県、岐阜県、鳥取県、兵庫県、岩手県、秋田県、福島県、鹿児島県、福岡県、山形県、宮城県、大分県、青森県、山口県、島根県、愛媛県及び群馬県の30都府県において確認されている。

6. 本虫の特徴

- 1) B系統の初期の食害痕はA系統と同様に不規則な白線状であるが、B系統は1葉に複数の幼虫が内部に潜り込んで集中的に葉肉を食害するため、食害が進展すると近接した食害痕が合わさり、葉が白化する(写真1、2)。
- 2) 幼虫はうじ虫状で、成長すると体長約4mmに達する(写真3)。蛹は体長約3mmの褐色、俵状である(写真4)。成虫の体長は約2mmで、胸部と腹部は黒く、その他の部分は淡黄色である(写真5)。形態によるA系統とB系統との識別は困難である。
- 3) 両系統とも成虫は葉の組織内に産卵し、ふ化した幼虫は葉の内部に潜り込んで葉肉を食害する。幼虫は成長すると葉から脱出し、地表又は土中で蛹になる。

7. 防除対策

- 1) 被害葉及び収穫終了後の茎葉は発生源になるので、土中に埋めるか、古ビニール等で被覆するなど適正に処分する。
- 2) 定植時には育苗トレイ灌注または粒剤を施用する。
- 3) 多発してからの防除は困難であるので、産卵痕や食害痕が見え始めたら早めに防除する。
- 4) 抵抗性害虫出現防止のため、同一系統薬剤(IRACコードが同じ剤)の連用は避ける。



写真1 B系統幼虫による食害



写真2 (参考) A系統幼虫による食害



写真3 葉肉内を食害する幼虫



写真4 葉肉から脱出して蛹化した蛹



写真5 成虫と産卵・摂食痕

病害虫防除所インターネットホームページ

URL: <http://www.jppn.ne.jp/kagawa/>